

## 国連 PKF が平和構築支援の現場において直面する課題

—国連ルワンダ支援団 (UNAMIR) 司令官の手記を通して—

饗場和彦

### 1. はじめに

「インテラハムウェ（フツ過激派の民兵集団）は幼いツチ族の子供を殺すのに、親の目の前でまず腕を一本切りとり、それから反対の一本を切りとるといふやり方を習慣にしていた。それから子供を出血させてゆっくりと死に追いやるためにマチューテで首を切り裂き、子供たちがまだ生きている間に陰部を切り落として、恐怖で顔をひきつらせている両親に投げつけた。そして両親はそれよりは少し手際よく殺されるのである」。国連ルワンダ支援団（以下 UNAMIR）を率いた国連事務総長特別代理（SRSG）、シャハリヤル・カーン（Shaharyar Khan）はルワンダで起きたジェノサイドの場面上記のように描写した<sup>1</sup>。フツとツチの人々が対立してきたこの国では、1994年4月から7月にかけての約3か月間に主にツチの人々約80万人が殺された。このジェノサイドは、その殺戮の量的、質的な特異性ゆえに多方面からの関心を集めたが、この関心、疑問、問題意識について少なくとも2種の次元がある。一つは「なぜ大量虐殺が起きたのか」という民族対立の問題を分析する次元と、もう一つは「なぜ大量虐殺を止められなかったのか」という平和構築支援の問題を分析する次元である<sup>2</sup>。ジェノサイドの発生から20年近く経過し、両次元において多様な研究や言及の蓄積がある。後者の平和構築支援の次元では、ジェノサイドの発生した前後の時期に国連 PKO・UNAMIR が現地に

<sup>1</sup> Shaharyar Khan, *The shallow graves of Rwanda*, I.B. Tauris Publishers, 2000, p.16.

<sup>2</sup> 前者の次元については拙稿「ルワンダにおけるジェノサイド（1994年）」松村高夫、矢野久編著『大量虐殺の社会史—戦慄の20世紀』ミネルヴァ書房、2007年、後者の次元については拙稿「人道的介入—“第二のルワンダ”にどう対応するのか」磯村早苗、山田康博編『いま戦争を問う—平和学の安全保障論』法律文化社、2004年；拙稿「人間の安全保障論と人道的介入—ルワンダのジェノサイドを事例に方法論的な観点から」『国際安全保障』30巻3号、2002年をそれぞれ参照。

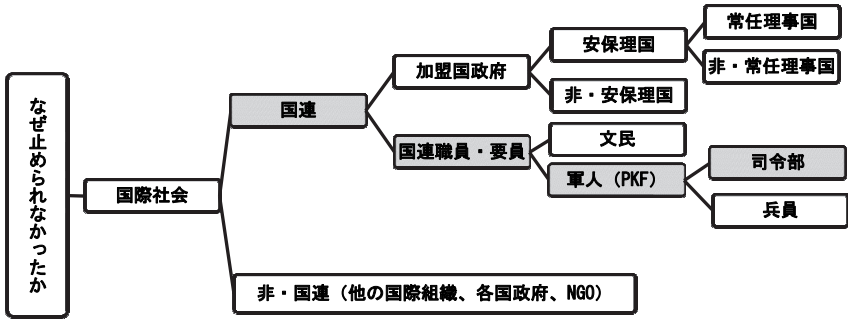
展開していたため、大量虐殺を止められなかった原因を国連に帰する論調が少なくない。だが国連以外の原因主体もあるし、そもそも国連といっても内実は多岐にわたるから、単純な国連批判論は妥当性を欠く。平和構築支援としてこの大量虐殺を止めえた主体を、したがってその止められなかった責任を帰せうる対象を整理すると、図表 I のように分類できよう。

そもそも大量虐殺はその発生当初から現地に展開していた UNAMIR を通して、また遅れ、偏りはあったとしても国際メディアが一定の報道をしたため、国際社会はほぼリアルタイムに大量虐殺の基本的な事実を把握していたといえよう。したがって大量虐殺を止められなかった原因主体はまず「国際社会」全体となるが、これは「国連」の枠組みと、「非・国連」の枠組みに分かれる。後者は国連以外の国際組織や各国政府の独自の関与、NGO の支援活動などを意味する。前者の「国連」の枠組みはその構造的性質から「加盟国政府」と「国連職員・要員」に二分せねばならない。「加盟国政府」の枠組みは意思決定の権能からさらに「安全保障理事会理事国」とそれ以外の「非・安全保障理事会理事国」に分けられ、安保理は「常任理事国」(P5) と「非常任理事国」でも影響力が違う。「国連職員・要員」の枠組みは「文民」と「軍人」に大別でき、軍人は司令部の「士官」と「兵員」に分けられる。このようにルワンダの大量虐殺を止められなかった原因主体は多岐にわたり、固有の要因、共通する要因、本質的な要因、技術的な要因などを内包する。

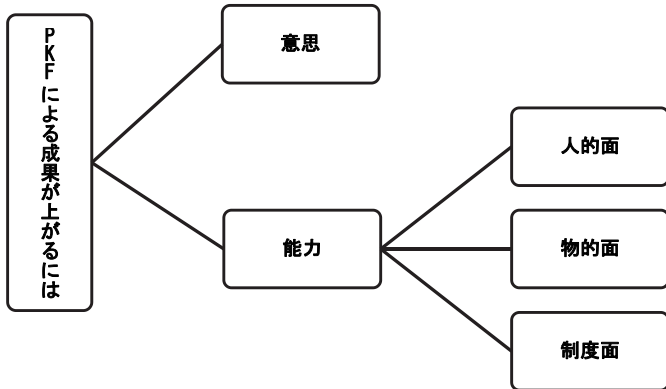
本稿では平和構築支援の次元においてルワンダのジェノサイドを考察するが、とくに図表 I で網をかけて示した主体、つまり「国連」の「職員・要員」における「軍人」の「司令部」という主体を切り口に分析を行う。この観点からの考察において有益なのが、UNAMIR 司令官、ロメオ・ダレール中将 (Lt. Gen. Roméo Dallaire) の手記である<sup>3</sup>。ダレールはカナダ陸軍の将校から UNAMIR に参画し、現地司令官としてジェノサイドの直前から渦中において現場で平和構築支援に関わった。その立場から、貴重かつ多様な知見が記録されている。本稿ではこのダレールの視点に依拠して、大量虐殺が止められなかった原因と、その責を負う主体について考察する。米国をはじめ大国の

<sup>3</sup> Roméo Dallaire, *Shake Hands with the Devil – The Failure of Humanity in Rwanda*, Da Capo Press, 2003; ロメオ・ダレール (訳・金田耕一) 『なぜ、世界はルワンダを救えなかったのか—PKO 司令官の手記』風行社、2012 年。

国連PKFが平和構築支援の現場において直面する課題



図表 I 大量虐殺を止められなかった責任主体



図表 II PKFの実効性にかかる要素

政府、安保理や国連事務局の観点から大量虐殺阻止の失敗を分析する研究は多いが、そうしたマクロ的、俯瞰的なアプローチもさることながら、ある意味逆のアプローチである、現場のミクロ的、直接的な視点は同様に重要な知見をもたらさう。

本稿ではまず、現地に展開して大量虐殺に直面した主体、UNAMIR の平和維持軍 (PKF) が抱えた原因、つまり「なぜ UNAMIR の PKF は大量虐殺を止められなかったのか」という問いを始点にダレールの証言をもとに考察する。そこから図表 I で示した多様な主体を踏まえつつ、包括的な原因・責任構造に言及する。

## 2 UNAMIR の PKF が抱えた課題

1993 年から 1994 年にかけての、大量虐殺が発生する直前から現に発生している状況において、大量虐殺を阻止する手段として最も直接的に効果があるのは武力であった。いうまでもなく大量虐殺発生前の比較的早い段階においては非軍事的手段も有効であり、またその直前、際中においても中・長期的に状況を改善させるために政治的、経済的な非軍事の取り組みは必要、かつ有効である。しかし現に大量虐殺の計画が具体化している切迫した段階では、抑止としての軍事力が不可欠であり、また大量虐殺が進行している段階では、加害者を排撃する対抗力としての軍事力、被害者を防護・救援するための軍事的な対応が求められる。この武力を担ったのが UNAMIR の PKF であった。ルワンダのジェノサイドにおいて、まず一義的に大量虐殺を止めた主体は PKF であった。

では、UNAMIR の PKF はどのような実態であったのか。「UNAMIR の任務は失敗だった」とダレール自身が認めている<sup>4</sup>。PKF が結果として大量虐殺を阻止できなかったという事実は明らかであるが<sup>5</sup>、その原因は何か。上述のカーンは、PKF に努力や勇気がなかったからでなく、単にマンデートと要員・

---

<sup>4</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.6; ダレール前掲書、6 頁。虐殺阻止の失敗に加え、ダレールの下で PKF の要員 14 人が殉職した。

<sup>5</sup> ただ、全体としての大量虐殺は阻止できなかったが、市民を避難所に搬送したり、集団暴行の現場に割って入ったりして、数人、数十人レベルの市民を救った個別の対応は少なくなかった。

兵站を欠いたせいであり、そんな中での彼らの業務は十分に英雄的だったと評価している<sup>6</sup>。確かにマンデート、要員の不足、兵站の不備は一義的に致命的な原因であるが、ここではこれら以外の要素も含め検証してみる。

ある行為によって一定の効果が生じるためには、その行為主体に意思と能力の両面が必要である。いくら意欲があっても能力がなければ無意味であるし、いくら能力があっても意欲が乏しければ十二分な成果は望めない。PKFの司令部と兵員は、この意思と能力の両面からどうであったのか（図表Ⅱ参照）。

まず意思という側面であるが、ダレール司令官をはじめ士官らの「大量虐殺を止める」という意思は相当強固であったと言えよう。ダレールの手記によると、出身国の異なる将校らで構成された司令部の中には一部、使命感のうすい人材もいたが、全体としての士気は悪条件の中でも一定して高く保持されていた。兵員の意思は指揮官に左右されるので、後述のように部隊の能力の弱点はあるものの、PKF全体としてジェノサイドに対処しようとする意思は存在し、「並外れた取り組み、決意、勇気」が繰り広げられたという<sup>7</sup>。とくに司令官であるダレールのジェノサイドに立ち向かう強靱な意思は、驚異的だったとあってよからう<sup>8</sup>。その意思は、カナダ国軍で鍛錬された将校としての責任感、天性であろう不屈の精神力、幼少時の体験に根差す利他的なヒューマニズムなどから構成されていた。ダレールは、悪化する現地の情勢と国連本部の消極姿勢の間で妥協を強いられ、結果的にPKFは苦境におかれるが、それでも「これは<私の>派遣団であり私が責任を持つのであり…不可能だと投げ出さず、ルワンダの平和のために全力を尽くそう」と決意する<sup>9</sup>。幼いころ、両親から自国の脅威でもないのにナチスドイツ戦に参加したカナダ兵の話聞き、「自分の利益を超えて、世界の平和と安全を脅かす悪を打ち

<sup>6</sup> Khan, *op cit.*, p.7.

<sup>7</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.436; ダレール前掲書、404頁。

<sup>8</sup> そのダレールの人並み外れた精神力でもってしても、ルワンダの体験を消化することはできず、結局、1年の勤務の終盤は、亡くした部下や見殺しにしたルワンダ人を追って「自分も死にたい」と思ったり、山羊を襲う野犬の群れに銃を乱射したりと、心身ともに消耗し、帰国後も心的外傷後ストレス障害（PTSD）で、数回、自殺未遂に至った。

<sup>9</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.83; ダレール前掲書、78頁。

負かすために献身する勇氣」を両親から受け継いだのだという<sup>10</sup>。ダレールは「もうやめる。できない」と言いそうになる中においても、UNAMIRの全面撤退案に反対し、「ルワンダを見捨てられない」と最小限に縮小した形でもとどまり続けた。

PKFの能力はどうであったか。能力については人的面、物的面、制度的面に分けて考えられる(図表Ⅱ参照)。人的面はマンパワーとしての量的な点と質的な点が問われる。司令部と兵員の能力はまず人的面において量的不足が明らかであった。ダレールが考案した部隊計画では当初、5500人の規模が適切と提案したが、安保理は2600人規模の縮小案しか認めず、しかもその小規模な計画ですら遅延し、現地の活動が始まってからもなかなか充足されなかった。94年4月に10人のベルギー兵が殺された後は270人規模まで縮小、ダレールは再三にわたり国連本部に対し増強を求めたが、全面撤退を避けるのが精いっぱいだった。安保理は5月になって漸く5500人規模のUNAMIR2を認めるがその規模の現地展開が完了するのは12月であり、すでに大量虐殺が収束して半年がたっていた。94年6月になってフランス軍中心のトルコ石作戦が始まり、大量の難民流出に耳目が集まった段階で幕僚、兵員らが増援されるが、大量虐殺阻止には手遅れであった。またフランス軍の介入はむしろ逆効果の面が強く、他の急派された外国部隊も在留自国民保護が目的であり、ダレールが意図した大量虐殺の阻止、ルワンダ人への人道支援という目的に資するものではなかった。

PKFの要員不足は致命的な弱点であったが、限られた人員の中、質的な能力という点では一定の水準が維持されていた。司令部の幕僚も当初から手薄であったが、そうした中でも幕僚の質的な能力は高く、ダレールは「静かなる奇跡の人」や「もうこれ以上はできないというところまで働く」部下、指揮系統を超えてでも上官に必要なアドバイスを、本来の意味での忠誠心の高い副官らを称賛している<sup>11</sup>。

ただ、司令官のダレール自身が自らの能力、資質について反省し、自身の個人的な過誤として2点を挙げている<sup>12</sup>。一つは国際社会への発信力・説得

<sup>10</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.12; ダレール前掲書、12頁。

<sup>11</sup> Dallaire, *op.cit.*, pp.499~501; ダレール前掲書、462~464頁。

<sup>12</sup> Dallaire, *op.cit.*, pp.515~516; ダレール前掲書、477~478頁。

力のなさである。ルワンダの悲劇は救い出すに足りる価値があるのだと世界を納得させる能力がなかったという。二つ目は、冷戦後の新しい平和構築の現場で活動する経験と知見の欠如である。自分はPKFの一員として現場に出た経験はなく、政治やアフリカの知識も不十分、内戦や民族紛争を想定した作戦に関わることもなかったという。カナダはダグ・ハマースキョルド (Dag Hammarskjöld) 国連事務総長とレスター・ピアソン (Lester Pearson) カナダ首相が創出したPKOに初期から積極的に協力してきたが、それは従来の停戦監視型のPKOであり、ルワンダのような事態における新しいPKO任務については当時、教育や訓練、準備が立ち遅れていたのだという。ダレールはそうした観点での能力不足が自身にあったと認めている。こうしたポスト冷戦型の「新しい戦争」における<sup>13</sup>、変質したPKO業務に対する専門性は、司令部の能力として重要な部分であるが、確かに着任前から着任当初のダレールのナイーブの言動はルワンダの実態—不信と憎悪と策謀が交錯する現場—とは乖離する面があった。

他方、兵員の質的能力はどうであったか。PKFの兵員は加盟国の有志が自発的に提供する自国軍の兵士から構成されるが、幕僚と同じく慢性的に量的に不足しており、質的にも出身国によってばらつきが大きかった。一般に欧米先進国の兵員は能力が高く、途上国の兵員は劣るというイメージがあるが、UNAMIRの場合、必ずしもそうではなかった。先進国の部隊としてベルギー軍が参画していたが、確かに装備は優れていたものの、その素行には重大な欠陥があった。指揮官の命令に従わない行動や、現地の女性との交遊、有色人の上官に敬意を示さないレイシズム的な感覚、さらには国連やベルギーを批判しているルワンダ人政治家を拘束して武器で脅す事件まで起こした。ダレールはベルギー政府に抗議し、撤収の勧告まで考えたが、それはこのベルギー軍によってむしろUNAMIRの能力が減退すると考えたからであった。逆に、ガーナ部隊やチュニジア部隊は装備は不十分ながら、ダレールの大きな信頼を得た。ガーナ兵はためらわずに先陣を切る積極性、補給がない中、自分たちでやりくり、調達する自立性にたけていた。チュニジア兵は少数だ

---

<sup>13</sup> メアリー・カルドー (訳・山本武彦、渡部正樹) 『新戦争論—グローバル時代の組織的暴力』岩波書店、2003年。

が団結力があり、ダレールの緊急出動部隊として常に切り札であり続けた。ただ、同じく発展途上国、バングラデシュから来た部隊は問題があった。大規模な部隊ではあったが、個人用の武器、装備しかなく、指揮官が少し英語を話すのを除いて、フランス語、英語、ルワンダ語いずれも解さない兵士らであった。兵員輸送車が壊れたように見せかけたり、道路閉鎖されているというそを言って現場に向かわなかったり、現場にいる兵員であっても UNAMIR 司令部の命令通りに動かないケースが少なくなかったという。

上述したのは PKF の能力における人的側面だが、部隊の物質的側面、つまり装備や補給などの兵站（ロジスティクス）面においてもその不備、不足は PKF の能力を著しく制約する要因であった。ことの性質は人員不足の問題と同様の面があり、ダレールをはじめ司令部の担当者が国連本部に再三要望しても充足されなかった。国連は NATO のように必要な人や物が言わなくても供給される「プッシュシステム」でなく、すべて要求して待たなくてはならない「プルシステム」であるから<sup>14</sup>、PKF で必要とする装備、設備、物品などは慢性的に不足、遅延し PKF の活動を支えるインフラは劣悪な状況であった。またその一因には、国連の官僚機構ゆえの手続きの煩雑さ、硬直さがあった。その厳格さゆえにたとえば懐中電灯を要望しても、電球と電池を明記しなければ、懐中電灯本体のみ届いてしまうという。そんな中、現場の PKF 要員らはファクス用紙を黄金にたとえ、お湯のたたえた洗面台を最高の贅沢と憧れ、期限切れのまずいドイツ製糧食を食べては紙のないトイレで下痢をしていたという。火力の増強を要請したが重火器は来ず、弾薬の補給はその支出をめぐって派遣国と国連がもめたため滞った。装甲兵員輸送車は、数か月経って届いたものの、20 台要請したのに 8 台しか来ず、そのうち動くのは 5 台だけで、使用マニュアルはロシア語であったという。

さらに PKF の能力を制約したのは制度的な側面の問題であった。この点ではマンデート（mandate）、指揮命令系統の二重性（chain of command）、運用の互換性（interoperability）などの課題を指摘できる。まず、現地の部隊が取れる行動は、国連安全保障理事会の決議に基づくマンデート如何によって変わってくる。UNAMIR に関する安保理決議上のマンデートは基本的に従来型

<sup>14</sup> Dallaire, *op.cit.*, pp.99~100; ダレール前掲書、93~94 頁。



の停戦監視 PKO の形式であり、国連憲章第 7 章に基づく平和強制タイプの活動ではなかった。したがって UNAMIR の PKF がマンデートに忠実に合法的な活動をするならば、停戦が破綻し、内戦が再発、大量の虐殺が起きる状況において、ひたすら監視、つまり傍観するしかないことになる。事実、ダレールは UNAMIR の軍事監視員がなすすべなく虐殺の現場で惨劇を傍観している場面を以下のように描写している<sup>15</sup>。

(ルワンダ政府の) 憲兵隊が一軒一軒 ID カードをチェックして回った。すべてのツチの男、女、子供たちが駆り集められ、教会に行かされた。その悲鳴で司祭と軍事監視員らが気づき、駆け付けた。しかし教会の入り口で拘束され、ライフルの銃身を喉元に突き付けられて、壁に叩き付けられた。彼らは銃口を見つめているしかなかった。…マチューテ (山刀) を持った多数の民兵らが教会に招き入れられた。

民兵らは空威張りの笑い声を立てて几帳面にベンチからベンチへと移動しマチューテで切り刻んだ。即死した者もいれば、ひどい傷を負いながら自分と子供の命乞いをした者もいた。誰も見逃してもらえなかった。妊娠した女性は腹を切り裂かれ、胎児をえぐり出された。女性は恐ろしいまでに切り刻まれた。男性は頭を割られ、即死するか長くもがき苦しんだ。子供たちは命乞いをしたが、親と同じ扱いだった。好んで生殖器が切り付けられ、犠牲者は放置されて出血多量で死んだ。慈悲も躊躇も憐れみもなかった。死の叫びを耳にし涙を流す司祭と軍事監視員らは喉元に銃を突き付けられたまま犠牲者を救うよう懇願したが、憲兵隊員の答えは、もっとその恐ろしい光景がよく見えるようにと、ライフルの銃身で司祭と軍事監視員の頭を持ち上げることだった。

こうした場面は枚挙に暇なく、ダレールはこの無為無策を甘受できず、平和執行型の強い対応を提案するが安保理、国連本部の PKO 局は一貫して消極的な姿勢を示した。

UNAMIR を 5500 人規模に拡大する安保理決議 918 号は 5 月 17 日に可決さ

---

<sup>15</sup> Dallaire, *op.cit.*, pp.279~280; ダレール前掲書、258 頁。

れ、憲章第7章が言及されたがその文脈は武器禁輸においてであり、PKFに積極的な武力行使を認める趣旨ではなかった<sup>16</sup>。対照的に6月22日の安保理決議929号では「ルワンダの人道危機は地域の平和と安全の脅威になっており」「憲章第7章のもとで行動し」、人道保護地域の設立、危機の人々の防護、人道物資の配給のために、「加盟国に…必要なすべての手段をとることを認め」ており<sup>17</sup>、平和強制型の合法的な武力行使の定式に沿っていたが、その主体はフランス軍中心の多国籍軍を想定しており、ダレールのPKFのマンデートとは別であった。フランス軍などの展開は、国際法的には合法性が高くても、人道目的の実効性としては不合理であり、ダレールはその展開に強硬に反対した。現地の状況、紛争当事者との関係においてフランス軍のプレゼンス自体が公平性を欠くため和平促進に逆効果であり、そもそもフランス政府の本意には普遍的な人道目的よりも固有の政治的な思惑が推認できたためであった<sup>18</sup>。

94年1月にダレールはフツ過激派からの内部告発を受けて大量虐殺計画やそのための武器庫の存在を知り、それらを急襲することでジェノサイドの勃発を事前に回避できるとして作戦を提案するが、国連PKO局のコフィ・アナン(Kofi Annan)らはダレールを叱責し「UNAMIRは積極的な役割を果たしてはならない。繰り返すが…監視機能に限定されるべきである」として、そのような強制的な行動を容認しなかった<sup>19</sup>。これは平和強制型の行動に出て失敗したソマリアの教訓もあるが<sup>20</sup>、安保理決議のマンデート上からも容認しづらいという面はあった。結果として大量虐殺を回避しうる最後の最大の機会は失われた。

制度的には、指揮命令系統の二重性も阻害要因であった。PKFに参加する部隊に対してPKF司令部からの指揮・命令と出身国の本国政府・司令部から

<sup>16</sup> S/RES/918(1994).

<sup>17</sup> S/RES/929(1994).

<sup>18</sup> フランスは従来からジェノサイドの加害側勢力であったフツ政権と密接な関係があったため、対抗するツチ勢力の敵対意識を激化させるし、フランス政府は国益のためにフツ政権の回復や、ミッテラン大統領の個人的な利権が念頭にあったと示唆された。

<sup>19</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.167; ダレール前掲書、155頁。

<sup>20</sup> 1993年10月3日にソマリアで米兵18人とマレーシア兵1名が殺害され、遺体が引き回された事件。

の指揮・命令とが併存、矛盾する問題である。事態が悪化する中、任務が困難化し危険度が増すと、ますます現地の部隊の必要性は高まるが、逆に本国政府は自国部隊を撤退させる配慮を高める。ダレールはベルギー軍の撤退やバングラディシュ軍の撤退を苦渋のうちに了解するしかなかった。国連加盟国の自発性にゆだねられる PKO は必然的に出身国政府の意向に左右されるが、現地における各国部隊の個別・具体的な活動においては PKF 司令部の指揮・命令に統一されるべきであった。しかし、たとえばバングラディシュ部隊はダッカの参謀長からルワンダ人の移送をするな、閉じこもれ、リスクを冒すなという指示を受けたため、PKF 司令部が現場への出動を命じても動かないことがあり、「彼らは UNAMIR の指揮系統を無視し、その結果生じた悲劇を見ないことにしていた」<sup>21</sup>。

また運用の互換性、共通性の問題も制度的な面で PKF の活動を制約した。多国籍の軍隊から構成される PKF は、個別の部隊ごとには同一の出身国としてまとまりはあるが、全体としては寄せ集めの組織であり、本質的に部隊間の調整には限界があった。使用言語や装備のばらつきは活動の効率性をかなり阻害した。ダレール自身はフランス語と英語のバイリンガルであったが、どちらかを使えばまだしも、英・仏語両方とも解さず、当然現地のルワンダ語も知らないという要員もいる中で「最も決定的に重要なメッセージでさえ、バングラディシュ兵がブロークンイングリッシュでウルグアイ兵に伝え、ウルグアイ兵がガーナ兵に伝え、ガーナ兵がフラマン語しか話せないベルギー兵に伝える」という有様であった<sup>22</sup>。無線は国連はモトローラ仕様が標準である一方、各国の部隊は VHF を使うため互換性がなく、中継局の不足や交換手の技能不足もあり PKF は不安定な通信インフラに悩まされた。

### 3 国連の文民職員・要員が抱えた課題

現地の国連職員・要員には PKF の軍人のほかに、紛争当事者に和平を仲介するために政治交渉にあたる文民、装備や物品の発注・管理、経理などの事務的な処理に当たる文民らがいた。彼らはダレールや PKF が活動するうえで

<sup>21</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.244; ダレール前掲書、225～226 頁。

<sup>22</sup> Dallaire, *op.cit.*, pp.231～232; ダレール前掲書、214 頁。

密接に影響しており、「なぜ大量虐殺を止められなかったのか」という問いを考察するうえで重要な原因主体であった。

現地の国連の活動を統括したのは国連事務総長特別代表 (SRSG) であり、まづジャック＝ロジェ・ブー＝ブー (Jacques-Roger Booh-Booh) が 93 年 11 月に SRSG としてルワンダに到着した。カメルーン出身のこの元外交官はリタイアしていたが、友人のブトロス・ブトロス＝ガリ (Boutros Boutros-Ghali) 国連事務総長に請われて着任、彼の政治、外交、ビジネス、国連のキャリア、国連事務総長との関係からしてうってつけの人物と当初、ダレールは歓迎したが、実際その見方は正しくなかった。10 時までには事務所に来ることはなく 2 時間のランチをとり、5 時には帰宅、週末にはめったなことで連絡するなどという仕事のスタイルだったという。意思と能力の点でも疑問があった。ブー＝ブーは「…大きな権限を持っていたが国際社会の政治的努力を引き出そうという気はなく」、「ルワンダという国や紛争、アルーシャ合意に関する専門性・知識、陰謀を突き止め対処する技術などなら新しいものを持ち込んでくれたわけではなかった」<sup>23</sup>。現場よりも国連本部の意向を優先する傾向があり、ダレールが過激派が準備している武器庫への対処を絶好の好機として提案した際も、反対する国連本部側の立場に立ち、友人のガリ事務総長を説得するようなつもりもなかった。ブー＝ブーはイースター休日のとき、フツ側の要人から別荘に招かれ、ダレールの反対に関わらずそれに応じたため国連の中立性の点で信頼度を落とす結果になった。SRSG としてフツ、ツチ双方の指導者の間で何度も和平の仲介や回復を図る交渉にあたったのだが、紛争当事者の溝が深いこともあり成果はほとんどなかった。

94 年 7 月に SRSG の後任としてカーンが着任した。カーンはバングラディシュの外交官で、アフガニスタンなどの紛争地での経験や危機管理能力の高い、有能なリーダーという評判であった。ダレールは着任後数日、一緒に仕事をする中ですぐ「最初からカーンが UNAMIR を率いてくれていれば」と夢想するほど<sup>24</sup>、ブー＝ブーとは逆に好感と信頼を寄せるようになった。ただその時点では、大量虐殺は収束局面であり、ダレールも一か月後には体調

<sup>23</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.118; ダレール前掲書、110 頁。

<sup>24</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.463; ダレール前掲書、429 頁。

不良で離任を余儀なくされた。

ブー＝ブー以外の国連の文民スタッフについてダレールが批判的に記しているのが、過剰な快適性へのこだわり、官僚的な硬直さであった。SRSGは豪邸に住み、高級車で移動、他の職員も発展途上国の紛争地という悪条件の中でできる限りの任務、生活の快適性を図るのだが、それはダレールにしてみれば「ルワンダ人のことより、自分たちの快適さを先に考えているというメッセージをおくる」ことであり<sup>25</sup>、望ましくなかった。文民職員が週末に国立公園に行ってゴリラを見るのはリフレッシュの効用はあろうが、夜間、週末関係なく即応する軍事要員からすれば、違和感は当然であり、そもそも貴重なガソリンを無駄に使っているという見方もできた。国連の事務局組織の官僚制はたびたびダレールの意欲をくじいた。ダレールはニューヨークの国連本部に出向いて虐殺の実態を必死になって説いて回ったが、5時を過ぎるといなくなる国連事務局に激怒し、劣悪な勤務条件の改善を訴えても木で鼻をくくったような受け答えしかしない主席管理官の職員に「私はあなたより多くのライフルを持っている。あなたはそれを見たいのか」と思わず脅迫までするほどに<sup>26</sup>、両者の溝は大きかった。

### 3 国連の加盟国政府が抱えた課題

「国連は加盟国を映す鏡である」と言われるように、PKFの軍人にせよ、文民にせよ、国連職員・要員の業務は基本的に加盟国政府の意向に左右されるのが、国連の機構としての本質性である。したがって1、2で上述したような原因主体による、大量虐殺を止められなかった要因は遡及すれば、加盟国政府の問題、特に大きな権限を持つ安全保障理事会の問題に起因するといえる。端的に言えば、安保理理事国、とくに5大国の政治的意思の欠如がその根源の要因であった。その意思の欠如は、アフリカの小国に対する恒常的な無関心と植民地意識、リスクとコストを考えれば引き合わないという国益観に由来していた。

ダレールはもっとも影響力のある米国政府の対応を終始、批判した。米国

---

<sup>25</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.108; ダレール前掲書、101頁。

<sup>26</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.417; ダレール前掲書、386頁。

の一貫した消極性は、その背景にソマリアの失敗があり、国益のないところにリスクやコストを負うのは不合理という打算的な判断に基づいていた。こうした国益観は大なり小なり各国政府に共通し、国際社会の本質からしてやむを得ない発想ではあるが、ダレールが憤慨するのはそうした本音を糊塗して表面を取り繕う、詐欺的な大国の姿勢だった。たとえば、米国政府の本心を端的に表現していたのが「一人の米兵の命を危機にさらすことを正当化するには、85000人のルワンダ人の命が必要だ」とする、米国政府職員の計算であった<sup>27</sup>。そうでありながらクリントン大統領は「ルワンダ人民を守り、人道支援を確実なものにするための努力において主導的な役割を果たしてきた」と声明で述べていた<sup>28</sup>。また米国はダレールの再三の要請を受けて、50台の装甲兵員輸送車を提供したが、貸与費用として400万ドルを求め、空輸費用としてさらに600万ドルを要求、英国も前金で50台のトラックを提供したが博物館に行くような代物で、現地で次々壊れていったという。「そんな取引が数多くあった」<sup>29</sup>。この点に言及して先述のクリントンの声明では、米国は「900万ドルを供与し、…50台の装甲兵員輸送車を空輸し、…ガーナ大隊に装備を支給した」とあるのだが、ダレールはガーナ兵は装備を受け取っていないし、供与したという900万ドルはどこに行ったのだ、とクリントンの虚言にあきれている<sup>30</sup>。

他の安保理常任理事国の中国やロシアもルワンダの場合に限らず、人道目的で武力を行使する人道的介入の発想には、主権侵害を表向きの理由に、本心は自国の人権侵害に対して武力行使を受けかねないという懸念から、基本的に賛同しなかった。

フランスは米国などとは逆に、積極的な関与を果たした。しかしこれもダレールが望む対応でなかった。フランスはジェノサイドの発生以前からフツ政権と近く、軍事顧問も常駐、フツのハビヤリマナ政権時のルワンダはフランス語圏の国家であった。ツチ主体のルワンダ愛国戦線（RPF）は隣国ウガンダを拠点とし英語を話すため、ルワンダ内戦はフランス語圏対英語圏と

<sup>27</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.499; ダレール前掲書、462頁。

<sup>28</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.472; ダレール前掲書、437頁。

<sup>29</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.376; ダレール前掲書、348頁。

<sup>30</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.472; ダレール前掲書、437頁。

いう対抗関係でもあった。そうした背景、経緯もありフランスからすればその国益の維持にはフツ側に肩入れする発想になる。またダレールは「ミッテラン大統領がハビヤリマナー一家と親しく、大統領の息子がルワンダで大きなビジネス利権を得ていた」という話を聞いている<sup>31</sup>。内戦の片方の勢力に加勢する動きがあれば、フツ・ツチの対立は当然激化するし、その結果、多数の民衆が引き続き逃げまどい殺傷されるのは明らかであり、ダレールは強硬に異議を唱えた。ダレールはトルコ石作戦としてルワンダと隣国ザイールに展開するフランス軍に交渉し作戦の変更を依頼するのだが、士官の一部は植民地意識から抜け出せておらず、また他の兵士の多くは大量虐殺の実態をよく知らないまま派遣された様子であったという。したがってRPFとの戦闘準備はできていたが人道支援の対応は不十分であり、大量殺戮の流血とHIVウイルスの恐怖からほとんど動けない状態でもあったという。さらにフランス軍が人道的活動として行った難民救援は、その中にフツの過激派や民兵も逃げ込んできたため、加害者をかくまう形でもあった。

当時の国連では安保理の議長国、ニュージーランドやチェコが積極的な人道目的の武力行使を主張したが、少数派であった。例外的にカナダ政府は自国の将校の活動を支えるため、予算の制約がある中、相当程度、ダレールを支える体制をとっていた。

#### 4 非・国連の主体が抱えた課題

ルワンダの大量虐殺の現場では、NGOが国連以外の主体として存在した。人道支援のNGOはPKFのような形で大量虐殺を止めるわけではないが、人道物資の提供や医療の提供、難民・避難民キャンプの運営などによって一定の生命を救える点で、有意義な活動主体であった。武力紛争や虐殺の渦中において活動できるNGOは少ない。当時のルワンダでは赤十字国際委員会

(ICRC)と国境なき医師団(MSF)ぐらいで、大量虐殺の最中でも病院は機能したものの、「紛争が終結するまでに赤十字で働いていた56人のルワンダ人が殺され、何人かの白人医師、看護師が負傷し、何百人ものルワンダ人患

---

<sup>31</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.450; ダレール前掲書、417頁。

者が救急車から引きずり出され、なぶり殺しにされた」<sup>32</sup>。

ダレールはそうした献身的な尽力を評価しているのだが、NGO が中立性にこだわる姿勢には疑問を呈している。患者の対応が追い付かない NGO の救護所でカナダ軍の医師と看護師が手助けを申し出ると、NGO 側はそれを拒否したのだという。中立性原則は「ゆるがせない倫理的な評価基準である」が、「あまりにも思慮なく原理原則を主張する」のは「本来の目的の実現を損なってしまう」<sup>33</sup>。軍と関わると NGO の中立性が損なわれるから眼前の患者の処置を拒むという姿勢の矛盾を指摘している。紛争地における人道支援活動では軍隊と NGO が競合するケースが多いが、両者の関係性や活動の形をめぐる「民軍関係」の問題は功罪両面からの評価があり、議論が分かれる課題である。

また難民や避難民がルワンダ西部やザイールにあふれる事態になって、多数の NGO が現地に殺到したが、その支援会合では多くの一致しない課題があり、また UNAMIR への多くの要求があり、ダレールを困惑させた。当時はむしろルワンダ南部でほとんど支援の手が入らない大勢の人々がおおり、ダレールはザイール・ルワンダ国境に対する支援は過剰すぎると批判していた。

## 5 おわりに

ダレールは必要な手段があれば大量虐殺は止められたと何度も述懐している。その判断によれば、少なくとも 4 種の効果的な対応がありえた。一つは、大量虐殺が発生する直前、フツ過激派の内部告発者から大量虐殺の計画とその武器庫について知らされた段階で、先手を打ってその武器庫などを急襲する手段であった。当時、ソマリアでの米兵の被害が加盟国に消極的な空気を生んでいたが、ダレール自身は「私は銃をぶっ放したがるようなカウボーイではな」く、「合理的かつ慎重な襲撃計画を提示した」というから<sup>34</sup>、ソマリアにおける米軍によるアイディード將軍捕獲作戦と違って、ダレールの作戦は一定の成果は見込めたのだろう。ただ上述のように、国連の PKO 局内部でこの提案は却下された。

<sup>32</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.297; ダレール前掲書、273～274 頁。

<sup>33</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.493; ダレール前掲書、456～457 頁。

<sup>34</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.147; ダレール前掲書、137 頁。



二つ目は 94 年 4 月に大量虐殺が勃発した、初期段階で増強した PKF が防護と抑止に当たる方策であった。大量虐殺が始まって 4 日目の 4 月 10 日、ダレールは「4000 人の有能な部隊があれば殺戮を止められるでしょう」と国連事務局に答え<sup>35</sup>、また 5 月の時点でも安保理決議 918 で認めた 5500 人規模の UNAMIR 2 が即座に現場展開していれば「あの狂気の沙汰を止められただろう」と確信している<sup>36</sup>。実際は 4 月の段階では安保理はむしろ UNAMIR の縮小を求め、UNAMIR 2 の展開も 5500 人が充足したのは 12 月になってからであった。

三つ目の方策は、大量虐殺の勃発する直前、直後の時期、先進各国が在留同胞を救うため急派していた外国部隊の活用であった。500 人のフランス特殊部隊、1000 人のベルギー降下部隊、250 人のアメリカ海兵隊などがルワンダとその隣国にいたため、ダレールは「訓練や装備が十分な、その規模の戦力でおそらく虐殺を止められた」というが<sup>37</sup>、そのような選択肢は一顧だにされなかった。

四つ目は、直接的な阻止手段ではないが、フツ過激派が民衆を殺害にあおりたてていたラジオ放送を止める、という対応であった。妨害電波の発信や放送施設への空爆などがありえたが、その手段を持つ米国に要請したものの、米国は「電波妨害のために国中に航空機を飛ばすには 1 時間で 8500 ドルかかる、…他国の放送局の電波を妨害することは国家主権の国際法に反する」という理由で応じなかったという<sup>38</sup>。

こうした対応が取れなかった根本要因を、ダレールは人間性の欠如という表現で総括している<sup>39</sup>。

私たちの中に人間性を注ぎ込むことがぜひとも必要だ。もし私たちがすべての人間が人間であると信じているのであれば…それは自分たちの行動によってのみ証明される。第 3 世界の状況を改善するために資金を用意し、

<sup>35</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.289; ダレール前掲書、266 頁。

<sup>36</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.374; ダレール前掲書、346 頁。

<sup>37</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.284; ダレール前掲書、261 頁。

<sup>38</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.375; ダレール前掲書、347 頁。

<sup>39</sup> Dallaire, *op.cit.*, p.522; ダレール前掲書、483～484 頁。

たとえばエイズのような破滅的な諸問題を解決するために時間と労力を費やし、兵士の命を人間性のために犠牲にすることによってである。

軍人は自国の主権を守るため山を行軍し、その生活には危険がある。将来私たちは人間性のために、国家の私益を超えて資源を費やし血を流すようしなければならない。…どんなに理想主義に聞こえようがこの21世紀は人間性の世紀にしなければならない。それは…国家や民族の善よりも人類の善を重視する時代である。

ここでのダレールの言葉の中で最も印象的なのは、兵士は自国のためのみならず、国境を越えて普遍的な人間性のため、つまり国際社会の公益のためにも命をかけるべきだ、とする点である。こうした国際公益を使命とする軍事機構があれば、ルワンダのジェノサイドにおいても積極的な介入がなされ、多くのルワンダ人の命が救われたはずだ、と言うのであろう。しかし各国の軍がそこまで画期的な意識変革に至るのは、容易ではない。結局、ルワンダのような悔悟を繰り返し、良心の呵責が一定の“臨界”に達して初めて、革命的な意識が具現化してくるのであろう。そこに至るまで、あと何度、ルワンダの惨劇が必要なのか。その遥げき道程を思うと、ダレールの手記の読後感は悄然たるものになる。

ダレールはこの手記の中で称賛にせよ、批判にせよ率直に明記しているが、特に批判されている側には相当の言い分もあろう。本稿ではそうした言い分、反論も酌んで公平な分析を行う形はとっていないが、ダレールの一方的、独断的な部分があったとしてもなお、PKFを率いた統括者としての現場からの視点は十分に有意義であるといえよう。